

村上真完・及川真介

『仏のことば註』(一)~(四)

——パラマッタ・ジョーティカー——

仏のことば註—パラマッタ・ジョーティカー—研究

『仏と聖典の伝承』

吉元 信行  
柏原 信行

一

原始仏典の中で、最も古い部類に属し、ブツダのことは忠実に伝えた経典として、有名な『ダンマパダ(法句経)』と『スッタニパータ(経集)』とがある。前者は、仏教の倫理的教義を教え、仏道入門の指針ともなるべきブツダの金言をテーマに応じて詩にまとめて集録したものであるため、南北両伝を通じて広く流布し、また、漢訳されて『法句経』として、わが国においても古くから親しまれてきた。後者の方は、特にまとまった編集方針で編纂されたものではなく、折りにふれて説かれた様々なブツダのことは詩句にまとめて集成したものである。

この『スッタニパータ』は南伝上座部の伝承であるため、經典全体として漢訳されたことはなく、わが国では、古くはあまり知られていなかったが、近年の文献研究により、『ダンマパダ』以上に仏教の原初的な形態が伝えられており、発展する以前の素朴な初期の仏教が示されていることがわかり、学問的にも極めて重要な經典として、内外に注目されることとなった。

この經典は、わが国においても種々翻訳されてきたが、ことに、中村元博士による翻訳『ブツダのことは——スッタニパータ——』は、岩波文庫に収められ、多くの人々の親しむところとなった。しかし、その翻訳の中で中村博士自身も指摘しておられるように、この經典には依然として難解な箇所があり、翻訳自体も必ずしも定着しているとはいえない。

このような文献読解に必須の資料として、パーリ仏典には膨大な註釈文献群(アッタカター)がある。このアッタカター文献は、単なる註釈にとどまらず、思想的、文化史的、文学的な種々の側面からの重要な資料的価値を持ったものである。このアッタカター文献についての総合的研究としては、先般、森祖道博士が『パーリ註釈文献の研究』という大著を公にされたが、筆者もかつて指摘したように、これら個々の文献については、ごく一部の例外を除いて、その翻訳や研究は皆無であった(吉元書評「森祖道著『パーリ註釈文献の研究』」、仏教学セミナー第四一号、七五頁参照)。ところが、その嚆矢として、最も重要な原始仏典『スッタニパータ』の註釈『パラマッタ・ジョーティカー(Paramatthajotika)』の全訳註と厳密な研究が、村

上真完・及川真介両氏によって完成・出版された。

もちろん、この『パラマッタ・ジョーティカー』の原典は、PTSのローマ字刊本でも全3巻からなる大部のものであり、まだいかなる国語にも完訳されたことのない前人未到の難事行であるだけに、この翻訳と研究が一朝一夕に完成した訳ではない。翻訳の第一冊目である次の著書が刊行されたのは、今から六年前の一九八五年のことであった。

A 村上真完・及川真介『仏のことは註——パラマッタ・ジョーティカー(一)——』(春秋社・一九八五)

それ以降順次(二)・(三)が刊行され、昨年末の(四)をもって翻訳そのものは完成した。ところが、息つく暇もなく、本年当初にその統編の研究編(付録)一巻が出版されたのである。それらを刊行順に挙げると次の如くである。

B 村上真完・及川真介『仏のことは註——パラマッタ・ジョーティカー(二)——』(春秋社・一九八六)

C 村上真完・及川真介『仏のことは註——パラマッタ・ジョーティカー(三)——』(春秋社・一九八八)

D 村上真完・及川真介『仏のことは註——パラマッタ・ジョーティカー(四)——』(春秋社・一九八九)

E 『仏のことは註——パラマッタ・ジョーティカー——研究 仏と聖典の伝承』(春秋社・一九九〇)

まず、本シリーズの訳・著者である村上真完・及川真介両氏について簡単に紹介することにした。E書の著者紹介によると、両氏は同年であり、共に東北大学文学部に在学した同級生

のようである。その後、村上氏は同じ東北大学の大学院に、一方及川氏の方は東京大学大学院に進学し、それぞれの研究を進めることになった。

村上氏の方は、現在、文学博士の学位をもたれ、東北大学の教授であり、数多くのインド哲学や原始仏教に関する業績を発表しておられる。以前は、主としてインド哲学の研究をされており、『サンクヤ哲学研究——インド哲学における自我観——』(春秋社・一九七八)を始めとするサンクヤ哲学に関する著書や論文が多かったが、最近は、『西域の仏教——ベゼタリク誓願画考——』(第三文明社・一九八四)など、仏教化に関する著書や、「諸行考(一)~(四)」(仏教研究一六〇~一九)などの原始仏教に関する意欲的な業績、さらにはヴァーインシュエーシカの研究など、幅広い積極的な研究活動を続けておられる。

一方、及川氏は、原始仏教が専門であり、立正大学の講師として、パーリ語関係の講座を担当され、地道にパーリ語註釈文献の研究をしてこられた。また、日蓮宗の僧侶として、最近は、日蓮に関する文献の和英対照など、日蓮宗の海外布教に関する業績を発表しておられる。A書の序文によると、この及川氏は、十数年前より『パラマッタ・ジョーティカー』の翻訳の仕事を続けてこられ、このシリーズが物されたのは、ひとえに、及川氏のひたむきな『パラマッタ・ジョーティカー』の翻訳活動と出版への発願がきっかけになったという。この及川氏の翻訳ノートに、村上氏がインド哲学・インド仏教に関する幅広い学識から手を加え、お二人の緊密な協力のもとに本シリーズが完成

することになったということである。

さらに、E書の予告によると、次のような辞典編一卷が続刊される予定であるという。

F 『パーリ聖典スッタ・ニパータ註索引・辞典』（春秋社・未刊）

そうすると、南伝パーリ仏典の中で最も重要な経典である『スッタニパータ』の註釈に関する全六巻にも及ぶ翻訳・研究・索引・辞典が完成することになり、これほどの難事行を成し遂げられた両氏にただただ感服の念を表すのみである。

本来なら、この全六部作の最後の辞典の完成を待って書評すべきかも知れないが、翻訳編四巻と今回出版された研究編一卷とで、その成果の概要はほぼつかみうると思うので、まず、翻訳編の後で出版されたが、内容的には本研究の序論としての意味も持つ研究編一卷について紹介し、そのあと、翻訳編四巻についてふれてみることにしたい。

## 二

研究編である『仏のことは註——パラマッタ・ジョーティカー——研究 仏と聖典の伝承』（E書）は、村上氏の執筆になる「第一部『スッタ・ニパータ（経典）の理解のために』」と及川氏の「第二部『パラマッタ・ジョーティカー（第一義解明）の理解のために』」の二部よりなる。以下、若干の私見を交えながら、順を追って本書の所述を紹介していきたい。

### 第一部 第一章 衝撃の書『スッタ・ニパータ（経集）』

本章冒頭において村上氏は、『スッタ・ニパータ』という原始仏典との出会いとその衝撃から語りはじめる。村上氏は、当初、本経の中で、「犀の角のようにただ一人歩め」という徹底した孤独の生き方に驚く。そして、その後この註釈『パラマッタ・ジョーティカー』によってこの経典を読みなおしたとき、その徹底した孤独の生活の背景に、心身の消滅・般涅槃への志向のあることを知り愕然としたという。そして、その註釈が、従来の翻訳とは異なって、的確に經典の文意を理解していることを知ったとのことである。そこで著者は、従来の翻訳に対する不満をあらさまに露呈する。たとえば、本経の中の「牟尼経」にある二〇九偈の翻訳にことのほか難渋したらしい。この偈の原典、および定評のある翻訳である岩波文庫『ブッダのことは』における中村元訳と村上・及川両氏による訳を対照してみよう。

Samkhāya vatthuni panāya bijjan

sincham assa nannupaveche,

sa ve muni jāttikayantadassi

takkam pahāya na upeti sambaham.

(Sn, p. 36.)

「煩惱の起る」基礎を考究して、その種を弁え知って、それを愛執する心を長ぜしめないならば、かれは実に生を滅ぼしつくした終極を見る聖

「存在の」諸の根底を熟慮し、「意識という」種子を殺し、これに湿り気（愛情）を与えないなら、それこそ聖者（牟尼）であり、生と滅との終極

者であり、妄想をすてて(迷える者の)部類に赴かない。

(『ブッダのことは』四二頁)

を見、思量を捨てているので、名状すべくもない。

(E書八頁)

この中で、原典のイタリック部分、翻訳の傍線部分について、註釈では、次のように解釈される。

生と死の終極である涅槃を見、思量を捨てている。ついには最後の意識(識)をも滅して、生存の要素の残余がない涅槃の境界(無余涅槃界)に達して、入滅(般涅槃)してしまつて、もはや、この聖者については、言葉をもつて何とも語ることができない。この方を神とか人とかと呼ぶことはできない。(E書九頁)

“na upeti sankham”  $\text{न\text{ा}\text{प}\text{े}\text{ति}\text{ सं}\text{ख}\text{म}}$  “cannot be called by a name” とどう意味であり (PTSD. p. 664) 註釈もその読み方を支持しているようである。この解釈は、また、本経第五章「彼岸道品」の学生ウパシーヴァの質問(一〇七四―一〇七六偈)における牟尼の究極の境地の解釈にも関わる重要な問題となる。

このような註釈に基づく厳密な読み込みにより、村上氏は、本経の目指す聖者の道というのは、「それは結局は無余依涅槃であつて、心身の完全な消滅であり、それは同時に輪廻の消滅となる」と理解し、さらに、「同時に大自然に帰することであり、或いは大自然、大宇宙の大いなる生命、大いなる力に帰ることであろう」と結論する(E書一三頁)。

次に、村上氏は、仏教における最も重要な概念である「涅槃

に関して、それを消滅と解することに反対した Frauwallner 説を吟味し、彼が「仏教の哲学的基礎を古ウパニシャッドの思想の延長線上において見る」点を批判する。そして、原始仏教では、古ウパニシャッドの思想とは視点・視座が異なっていることを指摘し、原始仏教におけるアートマンとは、修行し、向上を目指すべき実践的自己自身であることを明らかにする。しかも、ここで、松本史朗氏の近著『縁起と空 如来藏思想批判』における「原始仏教におけるアートマン理解」に疑義を呈している点は注目されよう(二八頁)。

この後、村上氏は、如来の死後の存否に関する論議、および仏身観について、『スッタ・ニパータ』の立場に立って厳密な点検をする。もちろん、原始仏教では、如来の死後の存否に関しては、それは、十四無記の中に数えられ、この論議に深入りすることを戒めている。ここで、村上氏は、積極的に如来の世界を認めようとする玉城康四郎博士の説に対する批判に論点を絞って論述する。玉城博士は、この問題に関して、如来の形そのものの消滅は、如来の自體性の表明であり、認識態度そのものの転換が求められているとしているのである。しかし、村上氏は、あらゆる論争や議論に関わらないという『スッタ・ニパータ』の基本姿勢から、原始仏教において、如来の死後の存否を云々するのはまったく当たらないという結論に達する(四二頁)。仏身観についても、村上氏は同様な基本的姿勢をとる。

そして、『スッタ・ニパータ』は仏を明らかにする書であると規定して、その末尾に説かれた仏への信を勧める讚仏偈(一一

四〇(一一四九偈)の内容から、原始仏教における仏身観を次のように想定する。

さて、ピンギャが信を寄せた仏とは何か。抽象的な仏ではない。その信に直ちに答えてくれるような仏である。しかし、その仏はもう生身の人間であるようには思えない。またその仏は入滅してしまった仏でもないであろう。不可思議な力強い存在のようである。(五四～五五頁)

しかし、この不可思議な力強い存在としての仏陀観から、原始仏教においても、後の『ミリンダパンハ』などにおける供養の対象としての仏のように、次第に仏身観の発展を見るようになる。このようにして、仏教の進展につれて、ウパニシャッドにおけるアートマンの思弁や神の観念などの影響もあり、次第に大乘仏教の仏身観へと発展したことが述べられる。この仏身観の変遷は、本書では別の視点から、「仏の先祖の系譜と仏の前生物語」という過去仏の思想として新たに論述されるが、第三章あるいは第二部とも関わる重要な問題であるので、後に改めてふれることにしたい。

**第二章 自然観と神観念と身心観** この章では、『スッタ・ニパータ』には、神的存在に満ちあふれる自然の世界が詠い込まれていることを様々な視点から論究する。まず、第二経の牛飼いと仏の対話の中で、自然現象の中の神や悪魔とその神や悪魔に語りかける当時の人々の生活を見る。さらに、神や悪魔だけでなく、經典には、夜叉、龍、阿修羅等の様々な神的存在との交流が詠われていることに注目する。そして、著者は、「仏

釈尊ゴータマの生きた世界は、そういう神々や魔に満ち満ちた世界であり、当時の人々の意識においては、神々との対話が自然に可能であった世界であろう」(一〇八頁)という。

当時の人々にとって、魔も神々も、現実に実在するのである。欲界・色界・無色界や地獄・餓鬼・畜生は宇宙でもあり、それと同時に彼らにおける精神状態であろう。これを、現代人の合理主義で割り切つてはいけない。子供の世界と子供の心理、老いた状態と老人の心。これらはいずれも身近な現実である。

『スッタニパータ』も『バラマッタ・ジョーティカー』も、いずれも典型的なパーリ仏教の現実主義に基づいている。苦も業も涅槃も何れもが現実である世界にこの書は導いてくれる。

これは、あたかも現代人が目に見える世界だけを生きていることに対する警鐘とも受け取れるであろう。二五〇〇年前の当時の人々は精神的には現代の我々よりは豊かであったのだ。当時の出家者たちはその様々な精神状況を神々として捉え、ことに心の迷い、あるいは修行の妨げになる種々の現象を悪魔との出会いと見て、それらからの脱却を目指したのである。

**第三章 パーリ聖典『スッタ・ニパータ』成立考** この章では、まずブッダの話されていた言語とパーリ語との関係について、諸先学の所説や考古学的遺跡・碑文に基づいて論述する。このような様々な観点からの検討の結果、従来の定説通り、マガダ語を話されたブッダの教えが、西・南インドに伝わり、その間に西・南方言の発音で語られ、それがスリランカに伝わりパーリ語になったという結論に達している。

次に著者は『スッタ・ニパータ』の発祥地についての考察をする。それについて、この經典内部にてくる人物や地名あるいは表現に注目し、その傍証を律典などに求め、『スッタ・ニパータ』が西南インド(デカン西部)に関係が深いという結論に達する。しかし、この經典がいつどこでどのように成立したかは、韻律・アシューカ王碑文・教法の伝承など詳細な検討の結果からしても容易に知ることはできないという。ただ、E書の二四四頁と二四五頁との間に綴じ込まれた「スッタ・ニパータの世界」という地図は、この問題を考察する上において、たいへん興味深いことを示唆してくれる。それは、『スッタ・ニパータ』に出る地名がマガダ地方とサーンチーやアジャーンターのあるデカン西部地方に限られているのに、註釈の『パラマッタ・ジョーティカー』のみに出る地名が、マトゥラー地方やガンダーラ地方に限られている点である。このことは、仏教の発展と伝播につれて『スッタ・ニパータ』が伝承され、そしてマトゥラーやガンダーラにおいて仏教が栄えた頃に『パラマッタ・ジョーティカー』のソースが成立したということを示しているからである。

なお、このような地図のほかに、B書の巻末に当時の南北両伝の世界観を分かりやすく説明する図表が三葉もつけられており、たいへん重宝である。

この章では、さらに、九分経との関連、仏滅年代、韻文と散文の新旧の問題にまで論究している。これらの中で、七仏通説偈についての種々の資料を駆使しての詳細な考察は特に注目さ

れる(二八四―三〇一頁)。この偈については、評者たちも多仏思想という面から最近別に論究した(吉元・柏原・茨田「原始仏教における過去仏・未来仏思想の形成」真宗総合研究所紀要第七号、六―七頁参照)が、本書によって更に多くの関連資料を知ることができた。

**第四章 苦行者の詩と『スッタ・ニパータ』** 近年、古い仏教聖典、なかんずく『スッタ・ニパータ』の中にジャイナ経典や『マハーバーラタ』とのパラレルになる偈の存在することが注目され始め、そこに仏教の興起と仏教以前の苦行者文学・沙門文学が深い関係にあることが種々の観点から論ぜられ始めた。この章は、この問題に肉薄する興味深い論究である。特に、次のような教祖に対する称号は、仏教のみならず、ジャイナ教などそれら沙門の宗教に共通して現れるものである。覚者(buddha)・勝者(jina)・世尊(bhagavat)・如来(tathagata)・導師よ(bhante)・阿羅漢(arahant)・沙門(samana)・仙人(ga)・牟尼(muni)など。このほか、仏教とジャイナ教のみに現れる用語として、辟支仏(paccakabuddha, patteyyabuddha)がある。したがって、この用語は仏教以前、ジャイナ教以前の古いルーツを持つものであると言われる。しかも、この語は苦行者・沙門を表す諸語と密接な関係があり、さらに、過去仏の思想とも結びつくこともわかってきた。

この問題について、著者村上氏はずいぶん以前に指摘したことがあるが(平野真完「過去仏について」印仏研九一―二)、ここでは、その指摘を更に展開して、第一章における仏の前生物

語との関係における過去仏思想についての考察に加えて、過去の聖者との関係において過去仏を考える方法論を展開する。そして、まだ仏教が興る以前の出家修行者（古仙人）たちの中に過去仏の祖型が考えられ、辟支仏の祖型とも同様であると結論する（三四三頁）。この問題については、評者たちも別の観点から種々論究したこともあるので、併せて参照願いたい（前掲拙稿参照）。

この章の最後に、余論として、スリランカにおける上座部系の部派である大寺派と無畏山寺派および大乘仏教の問題にふれて、次の及川氏による第二部への橋渡しとしているが、特にスリランカにおける大乘仏教については大変興味深い問題であるので、後でふれることにしたい。

第二部 『パラマッタ・ジョーティカー（第一義解明）』の理解のために 第一章 『パラマッタ・ジョーティカー（第一義解明）の著者』では、この註釈の著者について、前田恵孝・森祖道兩博士の業績をもとに論述される。ただ、この註釈の著者についての様々な論議およびブッタゴーサについての先駆的な研究が、前田博士のそれに先立つこと五年も前に佐々木現順博士によってなされていること（『仏教心理学の研究』学振・一九六〇年、一九九〇年法蔵館より改訂版、六九―一五頁）にふれていないのは残念である。ここでは、南伝仏教における伝統的なブッダゴーサの伝記である『サッダマンマ・サンガハ』『*Saddhamma-saṅgaha*』のブッダゴーサ伝の翻訳（五一―五七頁）がなされていて便利である。これは『チュラ・ヴァンサ』

*Cūḍavamsa* がない記事をも含み、非常に有益である。この書により、ブッダゴーサについてのみならず、一四世紀当時のセイロン島における弥勒信仰も何われ、興味深い。

ここで、著者の及川氏は、『パラマッタ・ジョーティカー』の中に他文献からの引用が多いことに驚きと戸惑いを示している。しかし、この註釈に限らず、パリーのアッタカター文献や綱要書文献全般にわたって見られることである。このことが、かえって森祖道博士の指摘するように、ずいぶん古くからアッタカター文献の源泉資料の存在したことの証拠にもなるのである（前掲吉元書評七一頁参照）。ここで及川氏は、この膨大な源泉資料を縦横に駆使するために、当時索引・辞書の類、または「人インデックス」の存在したことを予想するが、我々は、現代でも、スリランカ・ビルマなどの僧侶に、ほとんどの聖典を暗唱することのできる人をよく見かける。

次に、この註釈の生い立ちについて、その中に説かれる「由来物語」をもとにして、その種本はインド成立であり、スリランカで改編や増広の行われたことを明らかにする。

第二章 時代の背景と共にでは、スリランカの年代記をもとにして、上座部教団の中の代表的な大寺派と無畏山寺派との間の抗争、あるいは一時的に栄えた大乘仏教（後にもふれるように、実は伝統的な上座部の資料では、ほとんど意識的に無視されている）との関係などについて論究する。

第三章 パーリ仏教の世界では、第一部の村上博士の論述と重複するところもあるが、神々、夜叉などの下級神、動物など

が登場するパーリ註釈文献の世界について驚きの目で論述する。そして、そこにひたすらに死後の幸せを願う生天を願望する庶民の生き方と、そして、それに対峙するかのように、民衆の幸福と引き替えに犠牲者としてわが生命を捧げていった出家修行者たちの姿を見出だす。だからこそ、このパーリ仏教の世界は、今でも現代の南方仏教の国において、あの厳然とした僧侶と在家信者との関係として認めることができるのであろう。

### 三

次にA～D書の四巻にも及ぶ翻訳編の本文とその註を中心として、それに関連するE書における言及等を散見した結果、若干の気づかされた点をいくつかのポイントに絞ってあげてみよう。

#### (一) 差別の問題と業思想

A書(四三三～四九三頁)所収の「拜火バーラドヴァーージャ経(Aggha-Bharadvāja-sutta)(賤民経 Yasala-sutta)」は、一般的に仏教がカーストを否定していることの証拠として挙げられるものである。

ところが、「拜火バーラドヴァーージャ経」の中で「それをば賤民と知れよ」(四三九頁等)とされるものの内容は、いずれも、飲酒以外の戒を破ることと貪瞋癡に集約される。ここでの賤民に対するものがバラモンであるが、劣った者と優れた者との象徴として、賤民とバラモンが挙げられており、このことは、階級そのものを認めるものであり、甚だしい階級差別となつて

いることは明らかに知られよう。

また、C書(三三七～三九七頁)の「ヴァーセッタ経」も、バラモンの資格は業(行為)によることを説く経であるが、『バラマッタ・ジョーティカー』(三四八～三五二頁)では、人間の区別は、動物のように外見ではなく職業によるのであることを明言している。ここに挙げられていることは、明らかに職業による差別である。

このように、『スタタ・ニパータ』は、身分差別を既成の事実として肯定しているのである。ただし、この身分差別は、輪廻や鬼神の存在と同様に現実として存在した当時の時代背景によることを考慮せねばならぬであろう。その上で、改めて『スタタ・ニパータ』を『バラマッタ・ジョーティカー』とともに精読すれば、ここで説かれているのは、身分差別の撤廃という観点ではなく、業の重要性であることが明らかに。「拜火バーラドヴァーージャ経」の内容は、あくまでも生まれよりも行為によって人間存在が決定されるものであるということを説いているのは、その内容から明らかである。「ヴァーセッタ経」でも、強調されているのは業の重要性である。

著者は「拜火バーラドヴァーージャ経」について「この経の内容は、先の「敗亡経」と同様に、処世訓を懇切丁寧に説くものである」(A書四七五頁)とするが、ここに言われる処世訓とは、仏教におけるそれであり、立身出世とは無縁のものであることは言うまでもない。「敗亡経」においても、説かれているのは貪瞋癡であり、後に心所として立てられる煩惱であること



は自明である。パーリ仏教における業論は、即ち心理論であり、煩惱論もまた業に結びつくのである。

これらの経とそれに対する『パラマッタ・ジョーティカー』の解説には、当時の時代背景故に、階級そのものこそは否定されてはいなかった。しかし、生まれではなく行為としての業を重視するが故に、現実として存在するあらゆる生まれを超越して、仏教そのものが差別意識という癢を撤廃するものであることを、『スタタ・ニパータ』中の諸経とそれに対する『パラマッタ・ジョーティカー』が物語っている。

ところで、E書第三章「パーリ仏教の世界」の一『パラマッタ・ジョーティカー』の登場人物たちの「三人々と生きた者たち」(五〇六頁)には『パラマッタ・ジョーティカー』の中に登場する色々な人々や生き物が挙げられている。その中には、バラモン (brahmana) / クシャトリア (khattiya) / ヴァーイシヤ (vessa) / シュードドラ (sudda) / 下級の人 (omakapussa) 最も下等な連中 (naradhamā) / 犬殺し (sopaka 本文では大料理人) / 乞食 (vacaka) などが挙げられている。が、然し、この中には *Vasala-sutta* の賤民 *vasala* 及び註に登場する旃陀羅 (*chandala*) は挙げられていない。*vasala* は階級ではなく、単なる蔑称であるとしても、*chandala* は明らかに被差別階層である。「拜火・バーラドヴァーージャ経」(*Aggīkha-Bhavadāya-sutta*, 賤民経 *Vasala-sutta*) の本文についての注でもこの経と差別については触れられておらず、この「登場人物」の中にも取り上げられていない。これは、察するに、世間

的な解釈を退げんとして、意図的に避けられたためであろうか。以上の様に、仏教と差別という重要な問題を検討する上において、本書は多くの視座と資料を与えてくれるであろう。

なお、本書では、*chandala* に「非人」(仏教では、ふつう「非人」という語は *amanussa* の訳語であり、それは人間以外の天人等を意味する)、*vessa* に「庶民」、*sudda* に「奴隸」、*Vasala* に「賤民」などの訳語が与えられているが、差別問題の検討とも併せて、再考しなければならない問題点として残される。

#### (二) パリッタとの関連

『パラマッタ・ジョーティカー』に対する期待は『スタタ・ニパータ』の註であるばかりでない。「パーリ特有の集成である『スタタ・ニパータ』は、その中に最古の経典を含んでいるという点で、重要視されるのであるが、それだけではない。その中には、現在も南方仏教において、もっともよく誦誦される経典をも含んでいるのである。」と、はしがきに述べられる如く、現在の上座部仏教圏で誦せられるパリッタの研究の為に本書は欠かせない。

パリッタ中の極めて一般的なものである慈経 *Metta-sutta* についても、E書二二六頁で「慈経」を古い経典、しかも「義品」の第十四経よりも古い、とする見解は、我々のこれまでの研究方法では、全く到達しえないものである。「慈経」は、パーリ仏教では、今日にいたるまで有名な経であり、護咒(パリッタ)として用いられてきたことはよく知られている。けれども

漢訳には知られていないし、漢訳に相当する偈を見いだすこともこれまでには、できなかった。「漢訳等にそれに相当する偈がないような経典の中にも古いものがある、ということをお忘れはならない。」「一経典として古くからまとまった経典は、偶然にでも漢訳等に伝えられなければ、漢訳の中にあるわけがないからである。」「それが古くからまとまった一経典であったのではないか。」「それがむしろ新しい経であるならば、新しい改変も加わったことであろうか。」それに反して、パールの他の経典や漢訳等に種々に伝えられている偈を含む経には、かえって種々の伝承を後にまとめたものである可能性がある。」と、著者は極めて示唆に富む指摘をしている。

パリッタの幾つかは『クツダカ・パータ』の中に見いだされる。そして、『クツダカ・パータ』の中の多くのものが『スタ・ニパータ』と共通である。従って、パリッタの解釈には『スタ・ニパータ』及びその註の『パラマッタ・ジョーティカー』の参照は不可欠であった。しかし、『クツダカ・パータ』には三帰依文等、独自のものも含まれる。これの解説は『スタ・ニパータ』の註の『パラマッタ・ジョーティカー』Ⅱには含まれていない。

D書（一九三〇五〇六頁）には『クツダカ・パータ』の註である『パラマッタ・ジョーティカー』Ⅰも併せて訳出されていて、誠に、言うことなしである。これによって、三帰依、十学処、三十二行相、童子問（経）の内容の詳細についても判るのである。例えば、三十二行相中の脂肪と膏の区別も、『ヴィス

ッディ・マツガ』を参照するまでもなく皮下脂肪と皮脂腺の区別であることが容易に判る。しかも『ヴィスッディ・マツガ』では別に挙げられている比喩が、定義と同時に挙げられており、遙かに分かりやすい。B書（三七三〇四六二頁）所収の「大吉祥経」*Mahamangala-sutta*も亦、パリッタに取められ、非常に屢々誦せられる経である。この経のテーマは「めでたいこと、幸せ」についてである。内容からすれば、世間的な道德規範を説くものである如く見られる。しかし、『パラマッタ・ジョーティカー』によれば、この経は、幸福とは「見えるものか、聞こえるものか、思われるものか（香りや味や感触）」（三八二〇三八四頁）という議論に対して提示された解答であるとされる。そして、大吉祥経の中で、「これが最高の吉祥だ」として挙げられるものは五官に関するものではなく、全て、何等かの行為即ち業である点を指摘せんとしている。この『パラマッタ・ジョーティカー』の註が無ければ、ややもすると、この経は、単なる在家者向けの処世訓の如く捉えられてしまうかもしれない。一般的に「幸せとは何か」といえば健康・裕福・平等、何等かの状態が想定されるであろう。在家者からの幸せについての問いに対する格好の解答であると同時に、仏教における視点を明らかにしたものであるといえよう。著者註には「偈の主旨は在家者への教えであろう。」（四四三頁）とするが、それと同時に、ここにも顕われている業の思想は「出家者の生き方」にも通ずるものといえよう。それ故、在家者向きのものと出家者向けの結末が並存しているのではあるまいか。

『クツダカ・パータ』中の「吉祥経」*Mangala-sutta* には、さらに別の詳しい註も付せられているが、これについてはD書(三七五~四三一頁)に掲載されている。その中には *Ekam samayam* の *samaya* に関しての論議があるが、著者は *Athasālini* との関連も見逃さず、註(四二三頁)の中で佐々木現順訳『仏教心理学の研究』をあげて詳しく論じている。本書訳出の意義について、著者ははしがきの中で、次のように記している。

これから全訳しようとする『パラマッタ・ジョーティカー』の読解は、まず、難解な語句の多い『スッタ・ニパータ』の理解をすすめることであろう。それだけではない。これによって当時までスリランカに伝えられて行われていた仏教を知り、その著者の仏教観を知ることができる。南方上座部(テラヴァーダ)仏教の特徴がここに見られる。この分かりやすい行きとどいた文章は、この仏教の全体像をたくみに示している古典である。

ここには、大乘仏教とは異なった、しかし平易で懇切丁寧な教えがあり、多くの面白い物語もある。時には詳しい語句の解釈や修道の教理の細論もあるけれども、決して難解煩雑ではない。むしろ仏教を近づき易いものにしようにする姿勢がここに窺われる。そしてこれを『スッタ・ニパータ』とあわせ読むとき、そこに仏がめざし仏が示したと信ぜられた世界が、髣髴として眼前にひらけてくるであろう。

(vii頁)

この諷い文句だけでも、読者の興味をそそる事は疑いなくろ。が、更に『クツダカ・パータ』の註も併せて訳されているということは、南方上座仏教の所依の諸經典も詳らかに becoming ということであり、現代の南方仏教の理解を目指す諸学者を惹きつけて止まぬであろう。

(三) 大乘仏教の滅亡と上座部仏教の興隆

本書訳出には、もう一つの大きなテーマがある。即ち、はしがきは更に言う。「ビルマでも、インド東部でも、古くは大乘仏教が行なわれたといわれるのに」「西域(とくに南道)にも、インドネシア(ジャワ島)にも」「スリランカにも大乘仏教が伝わり、その遺跡もあるのに、今は行なわれていない。パーリ仏教のみが今日にいたるまで、存続しえたのは、なぜであろうか。その秘密が『スッタ・ニパータ』や『クツダカ・パータ』およびそれらの註釈書の中に、あるかもしれないのである。」(vi頁)

実際、スリランカからは近年、大乘經典の黄金製貝葉が発見されている。この他、スリランカには、大乘經典を記した銅板片やサンスクリットの刻まれた石板や黄金の普賢菩薩像などが出土している。また一方、黄金製の貝葉に經典を記すことは、上座部仏教圏のタイやタイ北部のチェンマイ地方でも行なわれたらしい(柏原信行「スリランカで黄金製『般若経』貝葉の発見」中外日報第二三一九六~八号参照)。

また、近頃『*The Vastuvidya Sastra ascribed to Manjusri*』(Text Deciphered & Translated by E. W. Marasinghe,

テキストが出版された。これは、スリランカの僧院内で発見された貝葉に基づくものである。ここには、伽藍配置や仏像について記されている。また、スリランカには仏像の形について詳細に記した "Sankhuta-bimbavana" と "Atakhyalakasana" と呼ばれる書があり、仏像の体型・比率について詳しく述べられている。これらもまた言語的に乱れてはいるがサンスクリットによるものである。後世（一二世紀頃か）このような展開をみせるスリランカの仏教の仏陀観の起源を探る上での示唆を、E書第一章の四、仏陀観（四八〜七四頁）は与えている。

著者は、仏陀観について論じた後、仏像について『ミランダ王の問い』が作られている時、仏像が作られ礼拝されていたかどうか知ることができない。しかし後には、スリランカにおいても仏像が作られ、礼拝されて今日にいたっている。その場合、仏像の出現がどのような仏陀観の変化にもとづき、どのような仏陀観を形成してきたのか、著者はいまだその答えを用意していない。今後の課題といたしたい。（六九〜七〇頁）としているが、いずれ近い内に、その解答を出されるであろう。

#### 四

以上、五冊にも及ぶ大著を評者たちの興味の赴くままに紹介をしてきたので、遺漏のあることをおそれるが、最後にこれら五冊の全体にわたる感想について述べ、責を果したいと思う。

まず、本シリーズには、他に見られぬ程、パーリの原語が非常に豊富である。これは、パーリ語を学習するもの、パーリ研究者にとって誠に有難い。また、サンスクリット学者にとっても、被益するところは大きいであろう。原語は、註釈書特有の語呂合わせによる語源解釈を知る上で、パーリ語を全く知らぬ読者に対しても不可欠である。原語は豊富ではあるが、決して読み進める上で、邪魔になるほどではない。これらのことから、いずれ近いうちに刊行されるであろうF書が期待される。

仏教術語は、あまり無理には現代語訳されていないが、完全な門外漢がこの書を手にするには却って好都合である。しか問題は無いであろうし、仏教学者には却って好都合である。しかし、全く仏教語ばかりではなく現代的な訳もなされ、「潜在的煩惱（随眠）」というように仏教術語も併記されている。英語等の現代の外国語による仏教関係の書による方が、却って仏教術語の内容が分かり易い場合があるが、この書はそれと同様の感覚を与えた。内容の平明さと、次々にあらわれる具体的説明に惹かれて読み進めば、自然にパーリ語と専門的仏教用語にも通暁するであろう。また、註における、他のパーリ・テキストやサンスクリットや漢訳の資料との豊富な比較研究は、諸学者にとって必見であろう。

訳語に関しては、特に細心の注意が払われているようである。なかでも、興味深いのは、「時に、なるほど」(atha kho)、「きた、なるほどその時」(tena kho pana samayena) 等、kho が、「実に」等ではなく「なるほど」と訳されていることであ

る。確実に訳されているので、箇所によれば、「なるほど」だらけの文もあるが、原典との参照には好都合である。しかし、この kho も「なるほど」ばかりではなく「いいかね。君。」(kho bho) とあるところもあり、柔軟性はある。

『パラマッタ・ジョーティカー』は『ニッデーサ』*Niddesa* に比して「わかりやすい」点が指摘され(E書四一三～四二八頁)、且つまた「誰にでもよく理解できるように一所懸命工夫して」あり(四二三頁)、全体として読者への気配りが感じられる(四二八頁)としている。教義の羅列ではなく、各種の具体例・実例、例えを挙げて解説している。因らずも、この『パラマッタ・ジョーティカー』から受け継がれた精神は、E書の第二部(及川氏の担当部分)において、様々な例を挙げさせている。そこに挙げられた例の中には、コンピュータあり(三八九～三九〇頁)、『日本書紀』あり(四四二頁)、第百回芥川賞の李良枝『由熙』あり(四五〇頁)、湯川博士と中間子理論あり(四五五～四五六頁)と、『パラマッタ・ジョーティカー』顔負けで分かりやすい。そして、ブッダゴーサの活躍した当時の背景へと論が進められ、「崩れかけてはまた固まる」といった状態にあった上座部僧団からパーリ註釈書が輩出したことも銘記すべきであろう(五二五頁)と結ばれている。危機のみから註釈書が著わされたのか、パーリッタとして現在でも盛んに行なわれているパーリ仏教の需要は、どこから由来するのか。この『パラマッタ・ジョーティカー』とその解説は様々な問題を改めて提起しているようである。そして、全体に亘り、

断定を避けつつ進められている両著者の考究は、我々に、多岐にわたる研究意欲を駆り立ててくれるようである。

いずれにせよ、原始仏典の中でもっとも重要な経典の一つである『スッタ・ニパータ』のこの膨大な註釈とそれについての研究が、二人という少人数の研究者の手で、わずか五年余りの歳月で完成されたことは、驚くべきことである。先駆的研究であるだけに、種々問題点もあろうが、しかし、それが日本語で読めるということは、研究者のみならず、関連する分野に興味を有する一般の識者を益すること計り知れないものがある。大部な、しかも高価な著書ではあるが、少なくともインドやスリランカの仏教・社会・歴史・文化などを研究領域とする研究者には是非座右に置いてほしいし、またそれ以外の研究者・識者も、図書館などで一度は閲覧してみてほしい本として、広く推奨する次第である。

(本稿は平成元年度文部省科学研究費(一般研究B)による研究成果の一部である。)

- A 書：一九八五年五月、五四五三九頁、一五〇〇〇円
- B 書：一九八六年七月、一八十六九八頁、一五〇〇〇円
- C 書：一九八八年一月、二四十八六四頁、一九〇〇〇円
- D 書：一九八九年十月、二十五〇〇六頁、一五〇〇〇円
- E 書：一九九〇年二月、一二五二八四四五頁、

一五〇〇〇円

(書名は本稿七二頁参照) いずれも消費税別、菊判、春秋社。